「賢治エチュード」

作：油田　晃

登場人物：

※こっち（あっち）の人々
恭子（高校３年生）
久美（高校３年生）

※まんなかの人
正裕（高校２年生　故人）

※あっち（こっち）の人々
猫の事務長
一番書記
二番書記
四番書記

なお、複数役を配するので、この限りではない。

場所：様々な世界に移り変わるが、それは原則、布と大きめの箱・教室によくありそうな椅子だけで表現する。それは、ここでもあり、ここでもなし。
便宜上、限定的となる場所は記してゆく。

（1　教室）

音楽
幕が開く。
そこは教室のようだ。
放課後。
模擬試験が終わり、答え合わせをしている２人がいる。
恭子と久美の２人である。
少し離れた所に、正裕が立っている。
二人、ポッキーをつまみながら、
答え合わせをしていると言った感じ。

久美：じゃ、次、問二。Ａが「ハ」
恭子：おお（と、自分の問題用紙にペンでマルを付ける）
久美：Ｂ、「ロ」

恭子：うん（再び、マルを付ける）
久美：Ｃ、「イ」
恭子：やるねえ、あたし。久美のは？（久美の問題用紙を見て）あ、Ｂが違う。
久美：Ｄ、「ニ」
恭子：「ニ」？、「ハ」じゃなくて？
久美：うん、「ニ」。
恭子：ああ、どうしてえ、「ハ」じゃないのかあ、
久美：「ニ」ですな、
恭子：「ニ」かあ、
久美：続いて、問三。
恭子：・・・・・、（ぼんやりしてる）
久美：どうしたの？
恭子：ん？、いやいや、
久美：続いて、問いの三、６０字で書きなさい。
恭子：はいはい、
久美：行きますぜ。・・「理想の世界を求めようとした宮沢賢治の作品群が、現在でも読み継がれているという事は、生きる事において教唆を与えるという事」
５９字。
恭子：・・・・・（再びぼんやりしてる）、
久美：間違ってた？こういうのってさあ、どう答え合わせしていいかわかんないよねえ。
恭子：問題文が、宮沢賢治の話だったじゃない？
久美：うん、そだね
恭子：あめゆじゅとてちてけんじゃ
久美：何それ？
恭子：詩であるんだって、「あめゆじゅとてちてけんじゃ」
久美：ふ～ん、
恭子：妹を亡くした宮沢賢治が書いた詩。
久美：よく知ってるね、
恭子：正裕にさ、教えてもらった。
久美：正裕？
恭子：うん。正裕って、宮沢賢治好きだったんだよね、
久美：ん？
恭子：正裕。宮沢賢治。
久美：そうだったの？へええ。
恭子：うん、なんか、詩とかあいつ、何も見ず言えるんだって、
久美：宮沢賢治の？
恭子：うん、
久美：憶えてたの？
恭子：多分。

久美　：すっごい。
恭子　：あいつ、そんなの憶えてる風に見えないじゃん、
久美　：うん、
恭子　：すごいギャップがあったなあって・・・。
久美　：・・・（解答集を閉じて）・・・、そうだね。もう半年は経つね。
恭子　：早い、ね。
久美　：うん。
恭子　：先生がさ、正裕が死んでからすぐ、教室の正裕の机の上に、花、置いたじゃない。
久美　：ああ、
恭子　：あたし、なんかそれが凄く許せなくてさ、
久美　：うん、
恭子　：なんか、花が机の上に置かれたら、もうそれで正裕は終わったみたいじゃない。
久美　：先生はそういう意味じゃなかったんでしょう。
恭子　：そりゃ、正裕への気持ちはあるんだって思ったけど、でもさ、まだ、まだ絶対、あのとき、私やみんな、正裕はまだ終わってないと思ってたって。だから、あの花が凄く腹が立って。
正裕　：そうカッカしなさんな。
恭子　：（同時）？
久美　：（同時）なんで、あんな大雨の日に川べりにいたんだろうね
恭子　：ねえ、あたし、今、正裕の声が聞こえた。
久美　：え？
恭子　：『そうカッカしなさんな』って、聞こえた？
久美　：ううん、全然。
恭子　：聞こえたって絶対。
久美　：またまたぁ
恭子　：いや、マジで
久美　：確かに、カッカしなさんなって、あいつよく言ってたね、
恭子　：正裕、いるの～？
正裕　：（口パクで）いるよ～
恭子・久美：・・・・・
正裕　：（動きながら、しかし、口パク）ここ、ここにいるって。
恭子・久美：・・・
恭子　：居る訳ないか、
久美　：うん。居たら恐いよ、
恭子　：それは言えますな

正裕、恭子と久美の間で、
注意を引こうとするが、二人には見えない。

久美　：（解答集を見て）続けますか、

恭子　：続けますか。

二人、再び答え合わせを始める。

久美　：問いの三です。「理想の世界を求めようとした宮沢賢治の作品群が、現在でも読み継がれているという事は、生きる事において教唆を与えるという事」５９字。

恭子　：ほお、なるほど。そりゃそうだ。そうやってまとめられればいいんだよ。ウマイよこの解答。

久美　：解答だからね

久美　：そうやって書ければ、どれだけ楽なことか。

恭子・久美：ねえ。

正裕、解答集に何やらする。

久美　：次、問四。

恭子　：ほい、問四。来たぞ２００字。来い！

久美　：（解答集を見て）？あれ？うん？

恭子　：ん？

久美　：『もしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利の粒にもあたるわけです』

恭子　：なにそれ、全然違うよ、

久美　：（違うページを開けて）・・

『またこれを大きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳の中にまるで細かに浮かんでいる脂油の球にもあたるのです』

（違うページ）

『そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるモノで、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮かんでいるのです』

（違うページ）

なんだこれ、ミスプリ？

恭子　：・・・銀河鉄道？

久美　：銀河鉄道だ。

恭子　：宮沢賢治の。「銀河鉄道の夜」

久美　：・・・ええ、もう、なんか恭子がそういう正裕の話するから、え、なんか恐いよこれ。

恭子　：・・・・ジョバンニとカムパネルラ

久美　：ねえ、なんかあたし恐くなってきたよ、恭子、帰ろうよ。

恭子　：え？、うん。

帰り支度を始める二人。

恭子　：ねえ、久美
久美　：なに？
恭子　：まっすぐ家に帰る？
久美　：え？どうして？
恭子　：うん、いや、どうすんのかなあと思って、
久美　：別に今日は何にもないよ、

久美、ポッキーの箱をゴミ箱（大きな箱）に捨てようと向かう。
正裕は、ゴミ箱の近くに立っている。

久美　：（ゴミ箱の前に立って）・・・・・・、ねえ、ゴミ箱がすっごく深くなってる。
恭子　：は？
久美　：深い。深いんだって。底なし沼みたい・・・。
恭子　：（ゴミ箱に向かう）・・・・・、本当だ。

久美、ポッキーの箱をゴミ箱へ捨てる。

久美・恭子：・・・・・・、消えた。
久美　：か、帰ろうか。
恭子　：そ、そだね。

二人、いったん上手にはける。
正裕、その方向を見送りながら、ゴミ箱に入り消えてゆく。
ト、
二人、再び戻ってくる。

恭子　：階段がなかったよ。
久美　：ない。
恭子　：廊下もなかったよ。
久美　：ない。
恭子　：窓も、教室も、
久美　：うん。うんうん、

ト、
どこからか男たちの声が聞こえてくる。

猫の事務長：（袖声）一番書記、氷河ネズミの産地はわかるか？
一番書記・白猫：（袖声）ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ川流域であります。

恭子　：なになに？
久美　：なに、ウステラなんとかって、
事務長：（袖声）四番書記、ベーリング地方を旅行する際の注意を述べよ。
久美　：え？
恭子　：誰がしゃべってんの？
四番書記・かま猫：（袖声）えーと、ベーリング地方は、えーと、えー、
事務長：（袖声）仕事が遅い。二番書記、ベーリング地方を旅行する注意点は？
二番書記・虎猫：（袖声）黒猫は十分に猫なることを表示しつつ旅行するにあらざれば、黒狐と誤認せられ、本気にて追跡さるることあり。
事務長：（袖声）よろしい。では、諸君、休憩しよう。
恭子　：こっちに来る。
久美　：どうする？
恭子　：え？えーと、

ゴミ箱から、正裕が手招きをしているように見えた。

恭子　：あそこ、あそこに隠れよう。
久美　：だめだって、さっき、おかしくなってたじゃん
恭子　：だって、
久美　：底なし沼になってるよ。
恭子　：もう、いいから。

恭子・久美、ゴミ箱へ。

久美　：なんか、これ、怖くない？
恭子　：いいから（と、久美を落としてしまう）
久美　：ちょっと恭子！

久美は、遙か彼方に行ってしまったようだ。

恭子　：・・・・・・・、

恭子もゴミ箱に消えてゆく。
照明が変わる。
事務長・白猫・虎猫・かま猫の４人（匹？）やってくる。
４人は椅子を横一列にして、座る。

（２　猫の事務所）
コップか何かを持って、どうやら休憩のようだ。
四番書記・かま猫はコップを持っていない。

事務長　：そもそもにおいてだな、我々猫が、まじめに仕事をするということ

自体が、間違えているんだよ。
一番書記・白猫：（聞いていない）
事務長　：そう思わないか、一番書記、
一番書記：え？何がっすか？
事務長　：私の話を聞いてなかったか？
一番書記：今は、休憩中ですからね、私は私のことをします。
事務長　：おっとっとっと。休憩中は、仕事ではないと来たよ、どう思うね、
二番書記。
二番書記・虎猫：ああ、もしもし、ああ、どうもどうも。いやあ、この間は、
アッハッハッハッハ。
事務長　：電話中か。
四番書記・かま猫：まじめに仕事をするのは私は好きですが、
事務長　：休憩中になると君しか話し相手がおらん。私は嫌われているのだろ
うか、いや、嫌われているんだろうな。
四番書記：いえ、そんな
事務長　：君たちは、仕事終わってから飲みに行って、私の悪口を言うんだ。
四番書記：言いませんよ、
事務長　：言う、言うんだ。みんな、みんな、今は猫をかぶってるんだ。
一番書記：事務長、我々、猫と、掛けましたね。
事務長　：うまいか？
二番書記：まあまあです。
事務長　：どうだ？
四番書記：おもしろいです。
事務長　：おもしろくないよ、おもしろくもなんともない。
四番書記：はあ。
事務長　：仕事には慣れたかな？
四番書記：いえ、みなさんにはご迷惑の掛け同士で。
事務長　：ここには、多くの猫がいろんな相談事にやってくる。
我々は猫世界のことすべてに精通していなければならない。
猫に関することは、我々は何でも答えられる。これは当たり前の
ことだ。
毎日毎日、いろんな相談事で、猫の手も借りたいくらいだよ。
一番書記：事務長、またまた、我々、猫と、掛けましたね。
事務長　：うまいか？
二番書記：まあまあです。
事務長　：どうだ？
四番書記：はあ、おもしろいです。
事務長　：今のはおもしろいと自分でも思った。
二番書記：今日は仕事終わったらみんなで、飲みに行きませんか？
一番書記：お、いいねえ、
事務長　：私も行ってもいいのか？
一番書記：どうする？

二番書記：どうしよう？
事務長　：ほら、ほら、私の悪口を言うんだ。
四番書記：あの、みんなで行きませんか？
事務長　：みんな、という言葉の中に、私は入ってるのか、入ってないのか？
　　どっちなんだ、
一番書記：入ってない
二番書記：入ってない
四番書記：入ってる
事務長　：２対１で、みんなに入ってないんだな私は。
二番書記：事務長のおごりならねえ。
事務長　：おごり？、私の？
一番書記：ええ、
事務長　：・・・・・、私は今日はやめておくよ。みんなでいきたまえ。
二番書記：ケチなんだよ、あいつ
四番書記：はあ。
一番書記：じゃあ、さんざん悪口言おうよ、
事務長　：行く！行く行く！私のおごりで行く！
一番書記：ええ、おごりでいいんですかあ～
事務長　：ああ、
一・二番書記：ごちそうさまです。
四番書記：（遅れて）ありがとうございます。
事務長　：よ～し、どんどこい。

ト、正裕がやってくる。

正裕　　：こんにちは～。
二番書記：休憩中です。業務再開までお待ちください。
正裕　　：ああ、はい。
四番書記：あ、私、話聞いてきます。
一番書記：君はなんだ、休憩中も仕事をすることで、点数を稼ごうとでも言う
　　んだな
四番書記：いえ、そんな、
正裕　　：休憩終わるまで待ちますから、
四番書記：あの、いいんですか？
正裕　　：はい。
事務長　：再び、休憩！

　　休憩の時間。
　　しかし、誰も動かなければ、話さない。
　　正裕、いいのかなという感じ。

四番書記：あの、もう休憩良いんじゃないでしょうか？

事務長　：はい。休憩終わり。業務再開！
一番書記：はい、なんでしたか？政治・経済関係のご相談は、ここからまっすぐ行って、突き当たりを右に折れてエレベーターに乗って、３２階。
二番書記：自然科学・医療福祉関係のご相談は、３７階と４８階、
一番書記：そのほかで処理できないご相談は、こちらで引き受けております。
事務長・一番書記・二番書記：ご用件は何でしたでしょうか？
正裕　：あのう、友達が、こっちの世界に来てしまったみたいで、
事務長　：こっちの世界に来た？あっちから？
正裕　：はい。
事務長　：どうして？
正裕　：いや、その、僕もいけないかと思うんですけど
事務長　：（遮り）友達というのは、あなたの、
正裕　：あ、はい。
一番書記：あれ？あなた、あらあ、人間じゃないですか、
正裕　：そうです
二番書記：珍しいですねえ、人間さんがこんなところに来るなんて、
事務長　：お茶でもお出ししてあげなさい。
四番書記：あ、はい。（いそいそと）
事務長　：君、お茶はぬるくないとダメだぞ、
四番書記：え？ああ、猫舌ということですか（ハケる）
事務長　：チキショ、あいつ、俺より先にネタをいいやがった。
一番書記：友達がこっちの世界ということは、なんですか、元々はあっちの世界にいたと。
正裕　：はい。
一番書記：あなた、こっちの人？
正裕　：はい。まあ、
二番書記：いつから？
正裕　：まだ半年くらいしか経ってないと思うんですけど。
事務長　：あっちからこっちへ来るのは、何ですか、何かあったとか、
正裕　：いや、その、僕が呼んじゃったみたいで、
事務長　：呼んじゃった、呼んじゃったの？
正裕　：ええ、その、僕もいけないかもしれないんですけど、嬉しくて。
二番書記：でも、じゃあ、プラグがあったということですよね、
正裕　：プラグ？
二番書記：ええ、まあ、私もよくは知らないけども、あっちとこっちをつなぐプラグがあって、たまにそれがつながっちゃうとかなんとかかんとか。
正裕　：そうなんですか、
一番書記：あんたよく知ってるねえ、
二番書記：お、それは褒めてるの？
一番書記：少し
二番書記：サンキューサンキュー。ただ。

事務長　：ただ？
二番書記：それは、その、少しやばいんじゃないですか？
一番書記：あ、そうなの？
二番書記：あんまり歓迎されないですよ、そういうの。
　　でも、あなた、そんな力あるってことは、まだこっちに完全にいるという訳でもなさそうですね。
正裕　　：それ、どういうことですか？
四番書記：（やや遮り）失礼します。ぬるいお茶です。（コップを渡す）
正裕　　：あ、すみません。（飲む）
四番書記：あの・・・、ぬるいですか？
正裕　　：ああ、十分ぬるいです。
二番書記：それで、そのお友達は？
正裕　　：それがどこに行ったかわからないんです。
一番書記：ふ～む、
二番書記：こっちに来たというは本当ですか？
正裕　　：本当です。
二番書記：なら、それはよけいに困りましたねえ。

事務長は、いつの間にか、居眠りをしてしまっている。

四番書記：あの、かま猫です。
正裕　　：ああ、すみません、正裕といいます。
四番書記：白猫さん、虎猫さん、あの、あっちで寝ちゃったのが事務長です。
一番書記：白猫です。
二番書記：虎猫です。
事務長　：（寝言）お母さん、もうそんなに食べられないよ、ムニャムニャ、
四番書記：あの、もうちょっと詳しく聞かせてもらってもいいですか？
正裕　　：あ、それはもう。
一番書記：あ、なんだ君は、仕事を横取りして、またまた点数稼ごうと・・・

ト、言ってる内に、仕事終了のチャイムが鳴る。

事務長　：（伸びをしながら）あ～、もうこんな時間だ。さあ、今日の仕事は終わりだよ～ん。そうだそうだ、今日はみんなで、みんなで飲みに行くんだった。
一番書記：じゃあ、行きましょうか、
四番書記：正裕さんのお話は。
二番書記：組合がねいろいろとうるさいんですよ。就業時間に関しては。申し訳ない。
正裕　　：はあ。
事務長　：さあ、行くよ、
四番書記：あの、私、お話伺ってから、行きます。

二番書記：おまえ、残業つけるなよ、
四番書記：はい。
事務長　：明日来てもらったら良いじゃないか。
四番書記：いや、それもあれですから、
一番書記：はいはい、行きますよ行きますよ。

一番書記・二番書記・事務長は、ハケてゆく。

（3）
四番書記：あ、行っちゃった。
正裕　：いいんですか？行かなくて、
四番書記：はい。大丈夫です。後で少し顔は出すつもりですから。
正裕　：そうですか。
四番書記：すみません、お茶出してたりしてたもんですから、きちんとお話聞いてないんですが。
正裕　：あの、僕の友達が、こっちに来ちゃって、
四番書記：はい
正裕　：あっちの世界で、話しかけてみたら、なんか聞こえて、それで、ちょっと嬉しくなって、
四番書記：こっちに来られた方は、おひとりですか？
正裕　：いえ、二人です。
四番書記：男性？
正裕　：女です。同級生です。
四番書記：なるほど。で、そのお二人の女性がどこにいるかわからないと。要はそういうことですね。
正裕　：はい。
四番書記：う～ん、なるほど・・・・・（考え込む）
正裕　：（窺っている）
四番書記：すると、その女性お二人を探し出して、あっちの世界に戻さないといけないという訳ですか。
正裕　：・・・大変なことですか？
四番書記：（切り替えて）お腹、空きませんか？
正裕　：いえ、あ、はい、空きました。
四番書記：一緒にご飯食べましょう。もっと詳しく聞かせてください。
正裕　：あの、飲み会は？
四番書記：ご飯食べてからで大丈夫です。

正裕・四番書記、ハケる。

（4　居酒屋）

恭子と久美、やってくる。

かなりお疲れのようだ

久美：あ、恭子、あそこに食べ物屋さんがある！
恭子：本当だ、お腹空いた。
久美：恭子、お金持ってる？
恭子：２０００円くらい、
久美：じゃあ、食べよう、
恭子：久美、あんたはいくら持ってんの
久美：５００円くらい、
恭子：少なっ、
久美：（居酒屋の暖簾か何かを開けて）こんばんわ～
恭子：（居酒屋に入る）
久美：（もう一度）こんばんわ～、
恭子：休みかな？
久美：うそ～、もう、あたし歩けないよ、
恭子：そうね、かなり歩いたよね、
久美：あのさ、どうしてさ、こういうことになるわけ？
恭子：さあ、
久美：なんかさ、あたし悪いことした？
恭子：してないと思うけど、
久美：じゃさじゃさ、
恭子：落ち着きなって、
久美：私は、恭子みたいに冷静じゃないんだって、
恭子：あたしだって、冷静じゃないよ、
久美：だって、だってよ、ゴミ箱に入ったら、こんなところに来たんだよねえ、これ何？学校が新しく作ったアトラクション？
恭子：それだったら、おもしろいんだけどね、
久美：（突然静かになり）・・・恭子、
恭子：何？
久美：お腹空いたあ～
恭子：誰もいないね、

ト、

事務長・一番書記・二番書記の３人がやってくる。

一番書記：（暖簾を分けて）こんばんわ、
久美・恭子：！！、
二番書記：今日、やってる？
恭子：・・誰もいらっしゃらないみたいですけど、
一番書記：（遮り）さあさあ、事務長、どうぞどうぞ、
事務長：なかなかのお店だねえ、さあ、何飲む？
二番書記：あ、事務長！お店にアルバイトさんが二人！こんばんわ！

久美　：こんばんわ（と、つい挨拶してしまう）
恭子　：久美、
一番書記：じゃあねえ、え～と、生中が３つに、枝豆と、ねぎまを４本、アスパラベーコン
久美　：（同時）はい、はい
二番書記：それから、砂肝バターと、鮭のちゃんちゃん焼き、
久美　：はい、よろこんで。
恭子　：久美、何やってんのよ
久美　：学校に内緒で居酒屋のバイトしてたから、つい癖で。
事務長：すみませ～ん
久美　：はい、よろこんで。
恭子　：久美！
事務長：この、どてカツというのは何？ドテっとしたカツ？アハハハハ、
久美　：（愛想笑い）
事務長：笑ってるよ、この子、いいアルバイトだねえ、
久美　：はい、よろこんで。
恭子　：あの、あたしたち、アルバイトじゃなくて・・
久美　：（恭子を引っ張りながら）いいから、恭子。
恭子　：だって、
久美　：厨房はいって、なんか食べよう。お店の人来たら、ちゃんと説明すればいいじゃん
恭子　：だけど、
久美　：恭子、料理できる？
恭子　：え？うん、
久美　：じゃあ、砂肝バターとねぎまお願いね、
恭子　：ちょっと待ってよ、
一番書記：生中まだ～
久美　：申し訳ありません、まもなく。よろこんで。
恭子　：その「よろこんで」っていうのは、言わなきゃいけないの？
久美　：うん、なんでもよろこんで。
恭子　：（結局、料理を作り出している）・・・・ねえ、
久美　：（ビールを注いでいる）・・・何？
恭子　：どうして、こうなっちゃたんだろう？
久美　：そうね、
恭子　：・・・・こんなことしてる場合じゃないよね。
久美　：・・・そうかな、なんか楽しいけど、
恭子　：久美はね。お店の人来ないのかな？
久美　：早く作らないと怒られるよ、また、
恭子　：え？うん、

ト、

事務長・一番書記・二番書記：カンパ～イ！
久美・恭子：え？
一番書記：このねぎまがね、なんか、特別なネギを使ってるらしいんですけど
事務長　：へええ、あ、美味い！
二番書記：美味しいですね、ここ。
一番書記：だろ、接待でよく使うんですよ、ここ。
事務長　：何、接待って？
二番書記：接待業務は、禁止じゃないですか？
一番書記：え？
事務長　：（にらむ）・・・、（が）ま、いいや、美味しいから。
一番書記：そうですよねえ、
二番書記：事務長にカンパ～イ、
事務長　：君、酔うのが早いな。

３人は飲んでいる。

恭子　：もう出来てる・・。
久美　：あたしたち、まだ作ってるのに、
恭子　：どうしてなんだろう？
久美　：お店の人が、いる？
恭子　：だって、厨房ここしかないじゃない？
久美　：うん。
恭子　：・・・なんか不思議な世界だな、
久美　：そだね、
恭子　：・・・夢なのかな、
久美　：絶対、アトラクションだって、そうだ、きっとそうだ
恭子　：・・家の人とか心配してるのかな、

ト、

四番書記が正裕と共にやってくる。

四番書記：こんばんわ、遅くなりました。
一番書記：そうだよ、遅いんだよ。
正裕　：お邪魔します。
事務長　：あれ、さっきの！
二番書記：おまえ、これは接待だぞ、
四番書記：いえ、そんな、
一番書記：お前も、生中でいいな、
四番書記：あ、はい。
一番書記：正裕さんでしたっけ？どうします？
正裕　：僕は未成年なので、
一番書記：じゃあ、カルピスにしなさい。

正裕　：カルピス？
二番書記：これは接待です。
四番書記：すみません。
一番書記：（注文をする）すみませ～ん、
恭子　：私行って来る。
久美　：よろこんで、言わなきゃダメだよ。
恭子　：うん、

恭子、５人のいるテーブルへ。

一番書記：えーとね、生中とカルピス。
恭子　：あ！
正裕　：恭子、
恭子　：え？え？どういうこと？
四番書記：あの？もしかして、お探しになってる方？
正裕　：はい。
恭子　：正裕、どうしているの？
正裕　：いや、うん、ご無沙汰。
事務長　：なんだ、万事解決か？
正裕　：恭子、久美は？
恭子　：うん、え？、あ、久美、久美！

久美もやってくる。

久美　：は～い、よろこんで。あ、正裕。
正裕　：よっ！
久美　：・・・・、あのさ、正裕。
正裕　：なに？
久美　：なんで、あんたここにいるのよ、
正裕　：うん、
久美　：というか、あたしたちがどうしてここにいるのよ、
ここどこよ、何なのよ、一体どういうこと？
説明してよ。
正裕　：まあ、そうカッカしなさんな。
久美　：カッカしたくなるでしょうが、
恭子　：（遮り）その言葉、前にも聞いた。
正裕　：やっぱり聞こえたのか？
恭子　：・・うん、
正裕　：そうかあ、恭子には聞こえたんだな。
久美　：ねえ、ここはどこなの？
正裕　：あの世、みたいなもんだよ
久美　：ええ！じゃああたしと恭子は死んじゃったの？

正裕　：そのなんというか、どういうか、その、俺も実はよくわからなかったりするんだよね
久美　：ちょっとちゃんと説明してよね、
正裕　：あの、どう説明すればいいんでしょう？
四番書記：あ、私ですか？いやあ、その、どう説明しましょう？
一番書記：要は正裕さんが、この世界に来ちゃったってことだ。で、君たちアルバイトも、そうなっちゃったってことだ。うん。
恭子　：アルバイトじゃありません。
二番書記：ええ！そうなの？
一番書記：しょーがねーなー。じゃあ、たまには勤務外で仕事をするか。
二番書記：特別に。
事務長　：（コホン）うん、つまりだ・・、
二番書記：（遮り）まあ、本当は、正裕さんはあっちにいないとダメで、あなた達はこっちにいないとダメなの。で、この世界はあっちでも、こっちでもない。でだ、正裕さんはあっちにまだ辿り着いてないんだ。だから、こんな、我々猫の世界に来るなんて言う変なことが起こる。
久美　：もう、訳わかんない。
事務長　：（改めて、コホン）つまりだ、世界というのは・・
一番書記：（遮り）つまり世界というのは意識の問題で形成されているのでありてね、それを本来定義づけてもしようがないんですよ。
恭子　：どういうことですか？
一番書記：「ここはどこ？」というのを、あなたたちは住所というものでやるよね。
恭子　：はい。
久美　：当たり前じゃん。
一番書記：天の川の中の星のどこかなんだけど、その天の川というのは、もっと大きな銀河系の中にあり、その銀河系は数え切れないほどある。大きくみれば「銀河系のどこかの星のなんとかいう住所」になるだけで、つまりそれは「どこ」というのを定義したところで本来は意味をなさない。暫定でしょ、
正裕　：うん、
久美　：話が大きいよ、
恭子　：つきつめれば、「どこ」なんてわからないってこと？
一番書記：その通り。
二番書記：時間だって同じでしょ、「いつ」というのをつきつめれば、それは、天体の始まりに行き着くとかいうけど、
正裕　：ビッグバン。
四番書記：そういうみたいですね。
二番書記：でも、そのビッグバン？それ以前にも時間はあると考えるのが、意識というやつだよ。
事務長　：（かなりがんばってコホン）つまりだ・・、

一番書記：（遮り）つまり、ここがどことか、今いつなんてのは、問うても無駄、愚問だと言いたいわけだ。まあ、冷たいかもしれませんがね。
久美　：じゃあ、あたしや恭子は？
事務長：意識の世界にいるとでも、言えばいいんじゃないかな？
　　お、やっと言えた。
恭子　：意識の世界・・・
二番書記：ただ、ですよ。
正裕　：ただ？
二番書記：このままだと、いけない。正裕さんは、あっちに行かなきゃいけない。
正裕　：・・・
四番書記：上手く言葉が見つからないのですが、正裕さんは、死んだということです
二番書記：死ぬ？うん、それも少し違うけど、そうしよう。その方が話が分かりやすい。要は、存在として、あなた方と正裕君は会っちゃいけない。だけど、なんだか会っちゃった。
正裕　：はい
二番書記：君が、こっちの世界に繋がりを持っていると言うことはだ。
　　つまり、君はまだ完全に死んだとは言えないの。
事務長　：これは困ったニャー、
一番書記：なんですか、突然猫声出して、
事務長　：いや、なんとなく、（冷たい視線を感じて）・・ごめんなさい。
一番書記：だから、仏教とかで言うでしょ、成仏って奴、
二番書記：でもそれは、あなたに何かあるから、そうなっちゃうということですよ。
正裕　：僕がですか？
四番書記：そうなります。
久美　：どういうこと？
恭子　：うん、
正裕　：・・・・、
久美　：あの、いいですか？
事務長　：（汚名返上）どうぞ！
久美　：あの、正裕さ、
正裕　：うん、
久美　：なんで死んだの？
正裕　：え？
久美　：なんであんなに雨が降ってる日に川べりなんかいたの？
正裕　：うん。
恭子　：・・・・、正裕、どうして？
正裕　：・・・・うん、
事務長　：微妙だね、答えにくい。
一番書記：なんでなの、正裕さん、

正裕　‥・・・・どこから話せばいいのか、
恭子　‥・・・なにかあるの？
正裕　‥いや、僕がいけないんだ、つい足をすべらせたんだ。
四番書記　‥・・・それは違うと思います。
二番書記　‥おい、それは職権乱用だ。
四番書記　‥でも、
恭子　‥違うってどういうことですか？
事務長　‥それは、正裕さんが正直に話すこと、それを受け入れるということだよ、
久美　‥ねえ、正裕、
恭子　‥あたしも、久美も、みんな、何でか知りたいんだよ。
久美　‥（うなずく）
正裕　‥・・・・・、
恭子　‥何でなの？
正裕　‥・・・・・・・、

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫なカラダヲモチ
欲ハナク
決シテイカラズ
イツモシズカニワラッテイル

いつの間にか、事務長・一番二番四番書記はいなくなっている。
それはまた、教室に戻っているような感じもして。

（5）

恭子　‥・・・・、賢治だね、
正裕　‥うん、
恭子　‥・・・・・、
久美　‥・・・・・・・、
正裕　‥なんか、俺がこんなことしなかったら、
久美　‥そうだよ、
恭子　‥ねえ、いつも私たちの近くにいたの？
正裕　‥うん、時々だけど。
恭子　‥ふ～ん、
久美　‥着替えとか見てたの？
正裕　‥見ないよ、
久美　‥見ようと思えば見えるの？
正裕　‥出来るんじゃないかな、
久美　‥ちょっと、
正裕　‥だから見てないって、

恭子　：・・・・・、
正裕　：俺さ、忘れられるのが怖いんだって。
久美　：？
正裕　：なんか、変な風に死んじゃったけどさ、彼女もできなかったし、やりたいこと一杯出来なかったけど、
恭子　：悔しい？
正裕　：最初は。すげえ悔しかった。
お前らちゃんとしろよとか思ってた。
だけどさ、それ以上にさ、みんな少しずつ俺のこと忘れてゆくんだ。
今、駅前が工事しているだろう。
久美　：うん、
正裕　：工事の前、何が立ってたか憶えているか？
恭子　：え？
久美　：・・・なんだっけ？
正裕　：お好み焼き屋だよ、
久美　：そうだ。
正裕　：みんな忘れてゆくんだ。・・俺のことも。
恭子　：そんなことないよ、
久美　：そうだよ。
正裕　：・・・・・・、

雨の音が聞こえる。
叩きつけるような雨、豪雨だ。
川は濁流のように流れている。

久美　：雨だ、
恭子　：・・・・・、

正裕、どこかへ走り出す。

恭子　：正裕！どこいくの！

恭子、追おうとするが、

久美　：あの日の雨だ。
恭子　：あの日？
久美　：たぶん、そうだよ、うん、絶対そうだ。正裕が死んだ日の雨だ。
恭子　：久美！
久美　：うん、

恭子・久美、正裕の後を追う。

暗転

（6　あの日）

雨の音はさらに大きくなり、
川の濁流も大きくなっている。

雨合羽を着た男たちがやってくる。
事務長→捜索隊１　一番書記→捜索隊２　二番書記→捜索隊３

捜索隊１：どうだ？
捜索隊２：全くダメです
捜索隊３：この流れじゃ見つからないでしょう。
捜索隊１：あきらめるな、俺はもうちょっと下流の方に行ってみる。
捜索隊２：応援呼びましょうか？
捜索隊１：そうしよう、くれぐれも無茶はするなよ、
捜索隊３：わかりました。

そこへ、四番書記→捜索隊４が現れる。
子供用の小さな傘を持っている。

捜索隊４：あっちで、あっちで、ずぶぬれになった女の子を発見しました、
捜索隊１：本当か？

走り込んでくる、正裕
恭子と久美も後からやってくる。

正裕　：・・・・、
恭子　：はあはあ。正裕、ここは。
久美　：はあはあ、川。
正裕　：俺の生きてた最後の場所
捜索隊２：無事、無事なのか？
捜索隊３：ケガは？
捜索隊４：擦過傷が何カ所かありますが、意識は、はっきりしています。
奇跡としか言いようがありません。
捜索隊１：よかった。
捜索隊２：よし。とりあえず、よかった。連絡しよう、無事発見と。
捜索隊３：連絡します。
捜索隊１：女の子の両親は？
捜索隊４：向かわせてます。救急車もまもなく、ただ、
捜索隊３：ただ、どうした？
捜索隊４：女の子が「お父さん・お母さんには会いたくない」と。
捜索隊２：どうして？

捜索隊４：わかりません。ただ、あそこの橋の上で、その女の子のものと思われる傘が。
捜索隊３：川べりじゃなくてか？
捜索隊４：はい。
捜索隊１：どういうことだ。
捜索隊２：落ちたのか？橋から？どうやって欄干を乗り越えるんだ、女の子の年齢は？
捜索隊４：３歳です。
捜索隊２：それは無理だろう。あの高さは、
捜索隊３：あ！（４を見る）
捜索隊４：・・・・落としたんでしょうか？誰かが？
捜索隊３：まさか、・・・女の子の親が、
捜索隊２：・・・・・、
捜索隊４：考えたくありませんが、何者かが女の子を落としたと考えなきゃいけないんじゃないでしょうか？
捜索隊３：両親が落としたのか？
捜索隊４：考えたくありませんが、可能性はあります。そうじゃなきゃ、お父さん・お母さんに会いたくないなんて、言いますか？
捜索隊１：・・・・・・・・、
捜索隊２：・・・・・、
捜索隊１：あんなちいちゃな女の子が、この川の流れで、自力で岸辺にたどり着いたとはとても思えんな。
捜索隊２：それは言えますね
捜索隊４：女の子に聞いてみないとわかりませんが・・・・、答えられるかどうか・・・、あの、誰かが助けたんじゃないんでしょうか？
捜索隊１：可能性は十分あるぞ。
捜索隊２：しかし、この流れでは・・
捜索隊４：とにかく探しましょう、いや、きっと女の子を助けた人がいるはずです。
捜索隊１：よし、下流域から河口付近を中心に捜索しよう、とにかく急ごう、時間がない。・・・・・、おい、
捜索隊４：はい。
捜索隊１：今の、女の子がなぜ落ちたのかの話、・・・・・。まずいだろう。その傘を川に投げ込め。
捜索隊４：いや、それは。
捜索隊１：私がその傘を預かる（と、傘を奪う）とにかくみんな急ぐんだ。

捜索隊４は、２・３に引っ張られる形で、探しにゆく。
捜索隊１、傘をじっと見て、川の流れに投げて捨てる。
川の音。

雨の音。
フェードアウト

正裕：次の日の朝、俺は川から２０キロ離れた、河口で浮かんでいるのが見つかった。
恭子：・・・・・・・、本当なの？
正裕：・・・・うん、一応。
久美：女の子を助けたのは、正裕？
正裕：自転車で帰ってたんだ。橋の近くで、女の子が、うん、
久美：落ちるのを見たの？
正裕：・・・・うん、
恭子：女の子の親が落としたの？
正裕：・・・・女の子が落ちたのを助けるので精一杯だった。
久美：でも、これって、
正裕：うん、
恭子：こんなこと。・・そうだったの？
正裕：・・・・・、
恭子：女の子は？
正裕：うん

ト、
捜索隊１と４の声しか聞こえない
（またはシルエットなど）で話している

（７）
捜索隊４：なんですか、こんなところで、話って。
捜索隊１：ここじゃないと話せないんだよ。
この間の、川で助かった女の子な、
捜索隊４：はい、
捜索隊１：・・・・死んだよ、
捜索隊４：死んだ？
捜索隊１：一家揃って無理心中だ。
捜索隊４：え？
捜索隊１：車で海にドボン。・・・・やりきれないよ。

間

正裕：・・・、俺、何だったんだろうな。
恭子：本当なの？
正裕：知らなきゃよかったんだけどな、俺、知っちゃったんだ。
久美：・・・・・、
恭子：何で知ったの？
正裕：女の子と両親が俺のところに謝りに来たんだよ。

あの人たちも、俺と同じ世界に来たわけだから。
（空元気に）なんかさあ、人助けしたんだぜ、俺。
でもさ、なんか、これ、むなしいじゃない。
受け入れろっていわれてもさ、そんなのちょっと、
ちょっときつくない？

恭子：・・・・うん。
久美：・・・・・・、助けなきゃよかったじゃない、そんな家族。
じゃあ、正裕今も生きてたじゃない。
正裕：そんなの見てみぬふりして、生きてる方が辛かったかもしれないよ
久美：・・・・・・、あんたらしいわ。
正裕：なんか、誰かにそれをわかって欲しかったのかな、それがどうして
も伝えたかったのかな？
恭子：・・・、
正裕：うん、なんとなくわかったよ。俺、全然、お前らにこれ伝えても、
すっきりしない。
久美：ダメじゃん
正裕：すっきりしないんだよ、いつまでも、たぶん。
恭子：うん、
正裕：それがわかった。うん、解決なんてするはずないんだ。

どこかで、機関車の汽笛が聞こえる。
３人そちらの方を見る。

恭子：・・・・カムパネルラだね。
久美：・・・カムパネルラ？
恭子：うん、「銀河鉄道の夜」で、ジョバンニとカムパネルラは銀河を旅
する。世界に戻ると、カムパネルラは、川に落ちたザネリを助けて、
もうこの世にはいなかった。
正裕：・・・・・、
恭子：「けれどもほんとうのさいわいは一体なんだろう」
正裕：「僕わからない」
恭子：「きっとみんなのほんとうのさいわいを探しに行く。どこまでもど
こまでも」
正裕：「ああ、きっとゆくよ」

四番書記がやってくる。

四番書記：正裕さん
正裕：あの、ありがとうございました。
四番書記：私は、明日こってり怒られそうです。かなり無茶をしてしまいました。

正裕　：でも、ありがとうございました。
四番書記：・・・・お二人は、まもなくやってくる汽車に乗ってください。
久美　：・・・
恭子　：・・・・、正裕、
正裕　：ありがとう。なんか、俺の勝手で、
恭子　：がんばってね、
正裕　：頑張るよ、死んでるのに頑張るよ、
久美　：変なの
正裕　：お前らもがんばれよ、
四番書記：・・・・・・、まもなく、来ますから、
正裕　：久美、
久美　：何？
正裕　：お前、毛糸のパンツとか履くなよな、
久美　：え？何で知ってるの？あ、お前やっぱり着替え見たんだな。
正裕　：一回だけ、一回だけ見たんだよ、ごめんごめん。
久美　：もうこいつ信じられない。
正裕　：そうカッカしなさんな、
恭子　：・・・・、憶えてるから私。
正裕　：え？
恭子　：私も、久美も、みんなも忘れないから。うん、
正裕　：・・・・、ありがとう。

汽車が近づく。

四番書記：さ、早く乗ってください。

恭子・久美、四番書記・正裕の距離は遠くなってゆく。

暗転

汽車は汽笛をあげて走り去ってゆく。

（8　教室）

明かりがつく。

教室に恭子と久美が入ってくる。

久美　：なんか難しくなかった？
恭子　：テスト？
久美　：うん
恭子　：優しいテストに私は出会ってみたい。テストは難しいものです。
久美　：言えますな
恭子　：何から行く？
久美　：解けたなあって感じたのは？

恭子：国語、
久美：あ、あたしも、
恭子：よし、やろうか。
久美：うん、国語国語国語と。はい。行きます。１番、問いの１、漢字ね。
まあ、これは自分で見てもらって、
恭子：はいはい、漢字は大丈夫と思う。
久美：じゃ、次、問二。Ａが「ハ」
恭子：おお（と、自分の問題用紙にペンでマルを付ける）
久美：Ｂ、「ロ」
恭子：うん（再び、マルを付ける）
久美：Ｃ、「イ」
恭子：やるねえ、あたし。久美のは？（久美の問題用紙を見て）あ、Ｂが違う。
久美：Ｄ、「ニ」
恭子：「ニ」？、「ハ」じゃなくて？
久美：うん、「ニ」。
恭子：ああ、どうしてえ、「ハ」じゃないのかあ、
久美：「ニ」ですな、
恭子：「ニ」かあ、
久美：続いて、問三。
恭子：・・・・・、（ぼんやりしてる）
久美：どうしたの？
恭子：ん？、いやいや、
久美：続いて、問いの三、６０字で書きなさい。
恭子：はいはい、
久美：行きますぜ。・・「理想の世界を求めようとした宮沢賢治の作品群が、現在でも読み継がれているという事は、生きる事において教唆を与えるという事」
５９字。
恭子：・・・・・（再びぼんやりしてる）、
久美：間違ってた？こういうのってさあ、どう答え合わせしていいかわかんないよねえ。
恭子：問題文が、宮沢賢治の話だったじゃない？
久美：うん、そだね
恭子：あめゆじゅとてちてけんじゃ
久美：何それ？
恭子：詩であるんだって、「あめゆじゅとてちてけんじゃ」
久美：ふ～ん、
恭子：妹を亡くした宮沢賢治が書いた詩。
久美：よく知ってるね、
恭子：正裕にさ、教えてもらった。
久美：正裕？

恭子　：うん。正裕って、宮沢賢治好きだったんだよね、
久美　：ん？
恭子　：正裕。宮沢賢治。
久美　：そうだったの？へええ。
恭子　：うん、なんか、詩とかあいつ、何も見ず言えるんだって、
久美　：宮沢賢治の？
恭子　：うん、
久美　：ふ～ん、
恭子　：・・正裕、何してるのかな？
久美　：ポカンとしてんじゃないの？あいつは？
恭子　：言える。
久美・恭子：（あわせて）そう、カッカしなさんな。

ト、
ゴミ箱がガタンと揺れる。

恭子　：いるのかな、この辺に。
久美　：うわ、怖いこと言わないでよ。
恭子　：ごめんごめん。

ぼんやりと窓の外を見る二人。
ト、
音楽が聞こえる。

久美　：正裕、元気ですか？元気というのも変か。
　もう、あれから半年も経ちましたね。
恭子　：みんなは相変わらずです。何も変わらないけど、あなたを失った寂
　しさだけは、これからも忘れずに持っていようと思います。
久美　：クラスのみんなで、今度お墓参りに行きます。そのときに、
　この詩を墓前で朗読したいと思います。

恭子　：雨ニモマケズ
　風ニモマケズ
　雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ
久美　：丈夫ナカラダヲモチ
　欲ハナク
　決シテイカラズ
　イツモシズカニワラッテイル
事務長：一日ニ玄米四合ト
　味噌ト少シノ野菜ヲタベ
　アラユルコトヲ
　ジブンヲカンジョウニ入レズニ

一番書記：ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニイテ

二番書記：東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負イ

四番書記：南ニ死ニソウナ人アレバ
行ッテコワガラナクテモイイトイイ
北ニケンカヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイイ

正裕　：ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ

全員　：ソウイウモノニ
ワタシハナリタイ

少しみんな微笑んでいる。
音楽大きく。
幕が降りる。

（終）

※参考文献

宮沢賢治詩集
銀河鉄道の夜
新編　銀河鉄道の夜
ポラーノの広場
注文の多い料理店（以上、新潮文庫）
宮沢賢治全集（ちくま文庫）

「銀河鉄道の夜」「猫の事務所」「補遺詩編」などから引用しました。
なお、現代文に直してある部分がいくつかあります。